

郡山市五百淵におけるツバメの集団ねぐら

佐藤 教彦

はじめに一五百淵について

五百淵は、寛永 7 年(1630)、この地方を治めていた会津藩主加藤嘉明が命により造られた灌漑用の池で、名倉地区にあるので名倉池とも「いお(五百)」などと呼ばれ、長いこと近くにあった数々の池とともに水田の灌漑用水池として利用されて来ました。

昭和 22 年(1947)に日本野鳥の会郡山支部が発足しましたが、その頃の五百淵の池近辺は、東西に水田が広がり、南には丘陵の山林、北側は畑が点在する丘陵地という環境なっていて野鳥の種類と数が多い場所で、郡山支部の探鳥地としてよく利用していました。この五百淵地区は昭和 27 年(1952)に禁猟区に指定されましたが、当時の五百淵全体の 1/3 近い面積を占めていたアシ原を、昭和 28 年(1953)からツバメが集団でねぐらとして利用するようになりました。その後は毎年、ツバメは夏から初秋にかけて、五百淵のアシ原をねぐらとしていました。

五百淵の西方には水田地帯が広がっていて南川の上流が続き、安積疎水の流れる小川やアシ原が残りオオヨシゴイなどの繁殖も見られたすばらしい自然がありました。しかし、昭和 40 年(1965)頃から埋め立てが進み、まず、久留米街道の東側が宅地化され、さらに五百淵との間に幹線道路の内環状線が造られ、さらにその東側も住宅地・マンション・店舗・結婚式場などが建ち並び、五百淵に隣接する場所には水田がまったく無くなってしまいました。

昭和 43 年(1968)日本野鳥の会第 14 回全国大会が、郡山市で開催されて探鳥には五百淵を案内しました。昭和 48 年(1973)には、五百淵と南側山林を都市公園として整備されることとなり、昭和 50 年(1975)、少しでも野鳥が好む果実のなる木々を植え、その後は極端な整備はせずなるべく自然の状態を保つよう、市の公園緑地脈に配慮をお願いしています。

平成 14 年 3 月五百淵の北側の国道沿いに、郡山市野鳥の森学習館が建てられ、野鳥観察の拠点として利用されています。

1. 五百淵のツバメのねぐら～成り立ちと推移

昭和 28 年(1953)から、ツバメが集団で五百淵のアシ原をねぐらとして利用し始めて、集まる数も年々増加していき、最盛期には数万羽のツバメがアシ原に集まった。

集まる数の増減はあってもツバメの集団ねぐらは毎年継続していたが、ちょうど 10 年目の昭和 38 年(1963)、五百淵北側を通る国道 49 号線が拡張整備される工事が始まり重機が大きい音で動き始めた。工事が終われば交通量も増えるであろうが、ツバメのねぐらに影響がないだろうかと心配したのがきっかけで、当時勤務していた郡山第 1 中学校の理科クラブの生徒の協力を得て五百淵のツバメのねぐらを生態学的に調査した。

* 昭和 38 年(1963)8 月 20 日 晴風なし 約 24,000 羽(調査年中の 1 日の最高集合数)

国道 49 号線完成後、五百淵には心配したような影響は見られず、ツバメの集団ねぐらは継続した。以下の項目 2～8 の内容は、昭和 38 年の調査結果からまとめたものである。

* 昭和 57 年(1983)9 月 1 日 曇 約 15,000 羽

昭和 58 年 (1983) 8 月 5 日	晴	約 10,000 羽
*平成 4 年 (1992) 8 月 22 日	雨	約 10,000 羽
平成 5 年 (1993) 8 月 23 日	曇	約 12,000 羽

この頃の五百淵のアシ原は遊歩道から陸続きであったが、水位が下がったか、水質汚染のせいかわかりませんが、奥の水際にはマコモやカヤツリグサ類が増殖し、手前のアシ原にはアメリカセンダングサやカナムグラの繁茂が目立った。平成 5 (1993) 年 8 月 9 日野鳥の会郡山支部有志が除去作業を行なった。しかし、その効果がなかったのか、次の年の平成 6 年 (1994) からねぐらとしての利用がなくなった。その後、アシ原と陸地の間に溝を掘り陸地と分断、さらにアシ原に水路を通す工事が施工された。上流にあたる西側の水田がなくなったので五百淵の水源地であった安積疎水の水は入らず生活用水が入るようになっていた。その後水路の改良が行なわれたので、水質が改善されたのかマコモが減って、アシ原の面積も広がったと思われる。マコモは茎が細く短いので、ツバメは止まらない。

昭和 53 年 (1978) 年に発行された清棲幸保博士著の日本鳥類大図鑑の増補改訂版には「郡山市五百淵のヨシやマコモの原には、毎年 6 月末から 9 月初めにかけて 20000~50000 羽のツバメの埒として利用する。そして 8 月初めから末までが最高で、その数は 35000 羽ぐらいに及ぶという。」と記述されて全国に広く知られるところとなっている。(なお、旧版である昭和 40 年 (1965) 発行の改訂新版には記載がないので、1978 年の増補改訂版に初めて他の地区の記録とともに追加記載されたものと思われる。)

このように有名な五百淵のツバメの集団ねぐらが無くなってしまっただけでなく、昨年 (2004) の 8 月に、再び五百淵アシ原にツバメが戻ってねぐらが復した。

*平成 16 年 (2004) ツバメがアシ原に集まり始めた。8 月 7 日 曇 約 2,000 羽
 今年は?平成 17 年 (2005) 8 月 27 日 (土) 天気: 時刻: ツバメ数:

2. 集まる時期とその数の変化

五百淵にツバメが集まり始めるのは毎年 6 月下旬頃からで、1 番子が巣立ちした時期と一致する。集団ねぐらに集まるツバメ数は、少しずつ数が増え、8 月下旬に最高の数になる。9 月に入ると日毎に数が減り、9 月上旬に集団ねぐらは解消する。~ある日から 1 羽も来なくなる。(この調査では 9 月 5 日) これは渡りのための移動が始まる時期である。この年の調査では、6 月下旬から集まり始め、8 月中旬から万を越す数となり、8 月下旬には 2 万を越す集団となって、9 月上旬には集団ねぐらは解散された。

アシ原の利用—ツバメの集合数が少ない 6 月では、アシ原の奥の水面に接した部分にまとまって止まり、集合数が多くなって来ると止まる面積が広がり、8 月下旬には通路に近いアシ原の周辺部まで利用するようになる。アシ原の中央部がねぐらとしての特等席になっていると思われる。

3. ツバメの集まり方

ねぐらに入るツバメの行動を時間的な流れで整理すると 4 段階に区分できる。

- ①集まり始め ②止まり始め ③止まり終わり ④静かになる

ツバメはアシ原に日没時刻の少し前の6時過ぎから群れで集まり始めるが、その日の天気と明るさによって大きく左右される。ねぐらとして利用し始めた6月下旬には、群れは小さく、入って来た群れがすぐに出て行き、また戻るなどねぐらに落ち着くまでに多くの時間がかかっている。アシ原に入って来るツバメの群れは20~30羽の範囲が多い。

集合数が多いときは、上空に入るもの、南の山林上を飛んで入るもの西側に開けた水田から進入する群れなどが入ったりして、その後しばらく間、出たり入ったりがあるのでどこからかツバメが沸いてくるような感じがある。

天気のよい日は、大きな群れで上空に入るが、天気のよくない日には周辺の木々の枝先を低く飛んで入ることが多い。集合数が多い8月下旬には、いくつかの群れが上空を旋回するのが見られ、上空よりほぼ垂直に落ちてきて、アシ原すれすれで身をかかわしてアシの茎に止まる。また、遠くから飛んで来るのか、採餌量が十分でなく遅くまで餌を採っていたのか、暗くなってから10~20羽の群れが直接アシ原に飛び込む小群もあった。普通アシ1本に1羽止まるが、集合数が多くなった場合1本に2~3羽止まることがあった。

ツバメの行動を時間的にみると、早い日は日没の30分前から集まり始め、日没後の10~30分で止まり終わる。集まり始めからすべて止まり終わるまでの時間は30~40分。止まり終わってしばらく「グジュグジュ…」鳴き交わしているが、10分くらいで鳴き止み静かになる。また、晴れた日には、日没時刻前後に集まり始め、短い時間で止まり終わる。曇りの日は、日没時刻より30分ほど早く集まり始め、長い時間かかって止まり終わる。

4. ねぐらからの飛び立ち

早朝4時30分過ぎに大群で一気に飛び立つ。アシ原に一瞬ざわつきが起こり、アシ原外周の西側・北側のツバメから一斉に飛び立ちが始まり、飛び立ちは3~4の大きな群で、数万羽という大群も極めて短時間ですべていなくなる。一旦南寄りに舞い上がり、さらに高く上り、ほとんど見えないくらいになって各方面に分かれる。飛び立ち時刻の明るさは照度計で測れないほど暗く、新聞の大見出しがようやく読めるほどの明るさであった。

5. 集まるツバメ数と天気

集合数と天気の関係を知るため種々の気象データを測定したが、気温・温度・風（風力3まで）・気圧については、まったく影響がみられなかった。しかし、その日の天気は集合数に大きく関係していた。雨天の日は、集合数が少なく、まったく集まらない日もあった。晴天の日の集合数は多い。曇天の日は、雨天より多く、晴天よりは少ない。

また、3項のツバメの集まり方に述べたが、「集まり始めの時刻」や「止まり始めから止まり終わるまでの時間」はその日の天候によって大きく影響を受けている。

6. 集まるツバメ数と明るさ

8/18・8/19・8/20の3日間について、集まって来る時刻の照度を測定してみた。いずれの日も照度が100ルクスを下回ると、ツバメの数が急激に増してくるので、暗くなることを感じて集まることがわかる。

7. どこから集まるか

五百淵に集まるツバメは、日中どこで過ごしているのか、また、どのくらいの範囲から集まるのか、知りたかったが調べる方法がなかった。それで目視による観察で行なった。北方向(開成・富田・喜久田)、西方向(久留米・針生・大槻・三穂田)、南東方向(安積・小原田)、北東方向(若葉町・富久山・日和田・市街地)の4方向から、五百淵に飛んで来ることが確認された。これらの4方向の先にはいずれも広い水田が開けていた。

8. 補足

(1)集まるのは幼鳥—五百淵の集団ねぐらは全国的に知られるところとなり、山陰鳥類研究所の標識調査(バンデング)が、昭和42年8月7日に実施された。専門的な知識や技術は持たないので直接のお手伝いはできなかったが、吉井氏や蓮尾氏にお会いし、お話したことがあった。かすみ網を用いて捕獲しバンデングしたが、ツバメはほとんどその年に生まれた幼鳥であること、ショウドウツバメが1羽混じっていたことを知った。

(2)白いツバメ—このときの調査には、白いツバメが1羽混じっていて目立った。いつも同じ場所に止まっていたので、他のツバメについても同じように考えられる。

(3)他のツバメ—イワツバメやアマツバメが五百湖上を、ツバメと一緒に飛ぶことがあったが、アシ原に止まることはなかった。

おわりに—五百淵のツバメの集団ねぐらについて、何か書いて欲しいと原稿の依頼を受けましたが、なにせ40年以上の昔のこと、記憶も虚ろになっていて、いい加減なことも書けず、何を中心に書いて文章を起こせばよいか本当に困ってしまいました。昭和39年頃、野鳥の会機関誌

「野鳥」に投稿して記事になっているのですが、以前に県外の会員から「ツバメのねぐらについて」問い合わせがあって一度その野鳥誌を出した記憶はあり、表紙デザインはよく憶えているのにどこにあるかその野鳥誌を探し出せずにあります。では、元の原稿はないかとあちこち探しても時間が過ぎるばかり、県大会の期日が迫ってきます。お盆中は家にいたので集中して探し、発表用の黄色くなったガリ版刷りの報告書をようやく1部見つけ、その資料をもとにこの原稿を書くことができました。データとなる図やグラフは省略しました。

なお、この調査は郡山第一中学校理科クラブ員で五百淵に近い菜根地区の3年生の部員6名を指導しながら行なったものであり、昭和38年度の読売日本学生科学賞に応募し福島県審査にて「最優秀賞」、全国の中央審査にて「第1位」の表彰を受けました。その後、地域の生徒たちと指導とともに調査したことが、地域の野鳥保護に功績があったと認められ、ご推薦を受け私個人が昭和43年(1968)に日本鳥類連盟の表彰を受けました。

最後に、五百淵のツバメ集団ねぐらが、これからも長く続くこと願って筆を置きます。

〈参考資料等〉平成17年度 日本野鳥の会郡山支部編集 五百淵探鳥のしおり

昭和38年度 佐藤教彦他 研究報告書 郡山市五百淵のツバメの集団ねぐらについて

昭和53年/11/25 発行/清棲幸保著/日本鳥類大図鑑/増補改訂版+昭40年改訂新版/ 講談社

平成10年2月1日発行 日本野鳥の会郡山支部50周年記念誌 かつこう